3年B組 金八先生

愛のポケット

小山内美江子

高文研

3年B組

金八先生 愛のポケット

小山内美江子

高文研

小山内美江子（おさない・みえこ）

1930年，横浜に生まれる。シナリオ作家。作品に「マー姉ちゃん」「父母の誤算」「親と子の誤算」「徳川家康」など。

著書に「金八先生シリーズ」（高文研）ほか『母と子の旅立ち』（労働旬報社）『すばらしき遭難』（旺文社）『21世紀を生きる君たちへ』（岩波書店）『そして幕があがった』上・下（毎日新聞社）などがある。

日本シナリオ作家協会，日本放送作家協会会員。

3年B組金八先生 **愛のポケット**

一九八八年一一月一五日――第一刷発行

★定価 八〇〇円

著　者／小山内美江子

発行所／高　文　研

東京都千代田区猿楽町二―一―八

三恵ビル内（〒101）

TEL 03＝295＝3415

振替口座番号　東京6＝18956

印刷・製本／凸版印刷株式会社

★乱丁・落丁本については、送料当方負担でお取りかえいたします。

© M. Osanai. *Printed in Japan.* 1988

0093-30008-2471

愛をあげよう、
ポケットの中の愛を。

あめ玉のようにしゃぶっててもいい。
心の傷口にそっとつけてくれてもいい。
気になるきみの友だちに渡してくれてもいい。

そうたんとはあげられないけれど、
心が渇（かわ）いたときは教えてくれ、
先生のポケットの愛をあげるから——。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅰ　先生はまだ一年生――11
Ⅱ　穴を掘る少年――79
Ⅲ　金八先生の〃五日間戦争〃――155

❖カバー・本文写真——東京放送（ＴＢＳ）提供

●――プロローグ

金八先生が歩いていく。荒川べりの高い土手の道だ。土手の斜面いちめんに生い茂った草の色も、川面を吹きわたってくる風の匂いも、以前と変わらない。変わったのは、人間だけだ。

金八先生が山の手から下町の桜中学へ赴任してきて、この土手の道をはじめて歩いたのが十年前、その後の十年間に、金八先生の身辺も大きく変わった。まず、養護教諭の里美先生と結婚した。まもなく、長女の乙女が生まれ、つづいて長男の幸作が生まれた。かつては肩までとどく長髪をなびかせ、短足をものともせず走りまわっていた青年教師、坂本金八先生も、いまや堂々たる(?)中年教師だ。

勤務校も、この春、桜中学から松ケ崎中学にかわった。ただ、受け持っているのは、むかしと同じ三年B組だ。

「年年歳歳か」

金八先生がポツリとつぶやいた。中国の古い詩だ。詩は、「花相似たり」とつづく。めぐりくる年ごとに、咲く花は変わらない、という意味だ。そのあとの詩句は、「歳歳年年、人同じからず」。

「そのとおりだよなア」
ちょっぴり感傷的になった金八先生の耳に、突然、切りさくようなホイッスルの音がとびこんできた。
「ピーッ、ピッピピッピピッピッ」
驚いて立ち止まった金八先生の横を、大森巡査の自転車が走り過ぎていく。
「オーイ、コラッ、そこの中学生！」
あわてて追いかけた金八先生の目に、振り返った加藤敏治の顔が見えた。右手にパン、左手に牛乳パックを持っている。
「そったらもの、どこの店サからチョロまかしてきた！」
大森巡査がいつもの東北弁なまりで詰問した。この大森巡査、相手が中学生となると、いつもこういう調子になる。それを知っているから、中学生の方も驚かない。
「買ったんだよ」
平然と答えた敏治に、大森巡査が青スジをたてる。
「ウソは泥棒のはじまり、正直に言いなさい、正直にッ！」
「ちょっと、君イ」

やっと追いついた金八先生が、大森巡査にカミついた。
「やたら泥棒あつかいは、ダンコ抗議する！」
金八先生も、大森巡査に向かうとすぐ頭に血がのぼるらしい。
「そうだよ。その先のパン屋さんで買ったんだから、ウソだと思ったら聞いてきてよ」
今朝（けさ）の敏治（としはる）はばかにハキハキしている。これがあの無気力な、いつも机の上にダラーッとのびている敏治とは思えないくらいだ。
「聞いてきてよ」と言われて、大森巡査の眉（まゆ）がキリリと上がった。
「だば、それまでここ動くな」
金八先生がたしなめた。
「そんなことしてたら、遅刻しちゃうよ。あんた、自転車なんだから、行って聞いてきてから追いかけなさい」
「金八くん！　なんで君は本官に命令するんだね」
大森巡査はふたたびキッとなったが、かまわず敏治の方に話しかけた金八先生に、チッと舌打ちして自転車を走らせていった。
「敏治よ、それにしても、なんで朝から買い食いなんかしてンだ？」

敏治（としはる）がニッコリ笑った。
「これ、朝めしだよ」
「朝めし？」
聞き返して、金八先生は、そうか、とナットクした。きのう、全校のいっせい授業で、快眠・快食・快便の話をした。その中で、「朝食は一日の出発の時点でのエネルギー源の確保である」と力説した。「学校に来たときから給食のことばっかし考えている」という敏治が、午前中ボーッとしているのも、朝食ぬきのせいだ、と話した。それでさっそく今日から、「エネルギー源の確保」につとめだしたというわけだ。なるほど、そういうことだったのかと、ほおをゆるませた金八先生に、敏治がさらにうれしいことを言った。
「あしたっからサ、夜のうち買って家で食ってくるつもりだけど、ホントだね」
「なにが？」
「やっぱ、朝たべると、体に力がつくみたい。あのオイコラにもちゃんと言ってやれたしサ」
イキイキした敏治のことばに、金八先生もうなずいた。これだから、教師稼業（かぎょう）はやめられないんだなあ。
「そうか。敏治、ほんとに力、ついたか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「うん」
「ヨーシ、じゃあ、ホントかどうか、学校まで競走してみるか？」
返事もしないで、敏治がパッと走り出した。「ズル……」といいかけて、肩にさげたかばんをひとゆすりすると、金八先生も勢いよく走り出した。
かくて今日も、金八先生の忙しい一日がはじまる。

●――プロローグ

I　先生はまだ一年生

●参考図書

家本芳郎著『明るい学校つくる教師の知恵』（高文研刊）

放課のチャイムが鳴った。校舎がいっぺんにざわめきはじめる。やがて、職員室の掃除当番の生徒たちが、用具を手に入ってきた。その職員室の一角——。
「給食研究指定校に立候補してきた?!」
とつぜん、金八先生が声を荒げた。
「そうです」
胸を張っているのは教頭先生だ。
「どうしてまた、そんなめんどうな」
にがにがしげに言ったのは中年の石田先生、三年の学年主任だ。しかし教頭先生は、まったく意に介(かい)さない。ますます胸を張って、こう言う。
「もともと教育とはめんどうなものです。十分に手をかけ、目をかけてこそ、教育はなりたつものなんです。先生方だって、きのうは全校いっせい授業で健康と生活リズムの話ができてよかったと言っていたじゃありませんか」
「けど、指定校となると……」
遠慮(えんりょ)がちに声を出したのは、寺尾純子先生だ。その名のとおり純情可憐(かれん)な松ケ崎中学のマドンナである。

「当然、東京都の教育委員会や学校栄養士部会の方たちの視察がありますよ。それだけ、本校が注目をあびるということです」

悠然と答えて、教頭先生はそばの校長先生の方をうながすように見た。りっぱな顔だちの、しかし教頭先生とは対照的に少し気の弱そうな校長先生が口をひらいた。

「つまりですね、平均学力も低く、ここ数年は区の体育大会でもふるわない本校としては、このあたりで何か生徒たちに緊張感を与え、他校に誇れるものをつくりだしたいという教頭先生の強いご提案で、その給食研究指定校に立候補することにしたのです」

「ああ、教頭先生のご提案だったんですか。でも、だからって給食指導なんかわざわざ買って出ることなんかなかったんじゃありません？」

皮肉っぽく言ったのは、田原麻知先生だ。相手がだれでもズケズケいってのけるすごい人だ。しかし教頭先生もビクともしない。

「何ごとも積極的に、これが本校の教育方針です。にもかかわらず、生徒の行動はあいかわらずダラダラしている。これでは、先生方の指導力に問題ありと見られるかも知れませんよ」

そのイヤ味な言い方に、金八先生がムッとなった。

「何をおっしゃりたいんですか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c